絵本表現の可能性

― 絵本編集者 末盛千枝子の仕事（前編）―

町　田　り　ん

はじめに

筆者は今年「すえもりブックス」を主宰した末盛千枝子[1]から末盛自身が選び、翻訳出版した絵本について学ぶ機会を得た。

末盛は1965〜1974年　至光社　1983〜1987年ジー・シー・プレスを経て　1988年に株式会社「すえもりブックス」を設立、2010年までに数々の優れた本を世に送り続けた。現在同社の本は文藝春秋と現代企画室から新たに出版を続けている。

1985年、末盛は『あさ　One Morning』[2]によりボローニア国際児童図書展グランプリ（Graphic Prize）を受賞した。

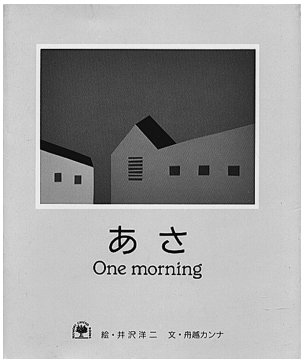

図1

最初に編集した絵本によって国際的な児童図書賞を得たことは何を意味していたのだろうか。末盛はその後も編集者として独自の世界を歩み続けた。「非常に個性的で人格があり温かい」[3] といわれる末盛の仕事の一端を追うことにより、絵本のクオリティについての末盛のこだわりに触れ、末盛に大きな影響を与えてきたアメリカの絵本編集者アーシェラ・ノードストロム、シャーロット・ゾロトウにも焦点を当てながら絵本表現の可能性について考察したい。

1　『エイプリルと子ねこ』

1986年ジー・シー・プレスに在籍していた末盛は『エイプリルと子ねこ』[4] を出版した。

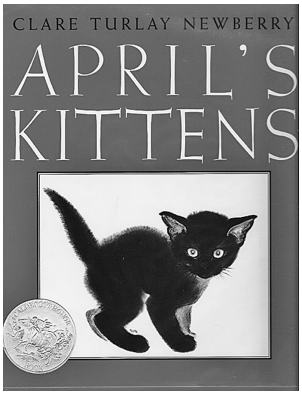

図2

『April's kittens』は1940年、ニューヨークHarper Collins Children's Booksから出版され、1941年コルデコット賞オナーブックに選ばれている。この絵本について、末盛は次のように述べている。

「私は、この絵本に描かれている猫は世界一可愛い猫だと思いました。絵本と言っても文章が長く、文章が多い時に、今だったら多分横書きにすると思いますが、多い文章を横書きにする事に、私自身の抵抗があって、それを印刷屋さんと四苦八苦して全部縦書にしました。（図３，４）そうすると逆から開けることになりますが、様々工夫して本当にいい本

になったと思います。

それと、普通の四色オフセット印刷ではこの墨の色が出ないのです。それで印刷屋さんが自分のところじゃない別の印刷屋さんを探してきてくれて、活版印刷じゃない、墨の本当に濃い色を出すグラビア印刷をするところを探し、真っ黒な墨の色を出してもらいました。（図５）

最初普通の印刷でやってもらったら、全く出ていなくて、この本でこの色が出なければ、どうしようもないと思ったのですけれど、ちゃんと印刷屋さんが自分のところではないのに、探してくれて、そうやって出来たのです。」[5]

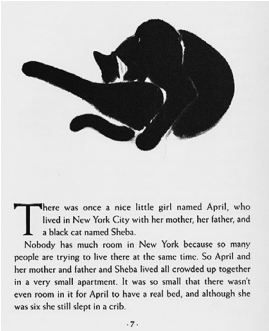

図３

図４

図５

Harper Collins Children's Booksで、1940年から少年少女の本編集部を統括したのはアーシェラ・ノードストロム[6]だった。つまり『April's kittens』は、アーシェラ・ノードストロムの編集による最初の絵本のひとつということになる。

『伝説の編集者ノードストロムの手紙』[7]によると1940年当時Harper Collins Publishersの児童書編集部門は3人しかいなかったという[8]。同書のなかでノードストロムは『April's kittens』の作家クレア・ターレイ・ニューベリーに次のように手紙を送っている。これは『April's kittens』から７年後の1947年の、同じような子猫の絵本『Smudge』（図６）についての手紙である。ノードストロムという編集者と作家の関係を彷彿とさせる興味深い手紙である。

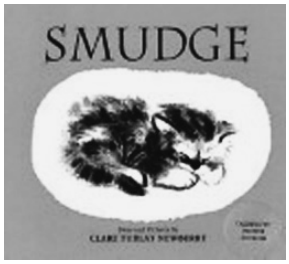

図６

「クレア様

ダミーを受け取り、メアリと一緒に拝見しました。楽しい、すばらしい本になりますよ。とても気に入りました。ストーリーに関するコメントはあまり気にしないでください。そのことをお伝えしたかったので、今日はあなたに電報を送ろうと思っています。クレア、私はあなたの絵にすっかり惚れ込んでしまっているので、文についてなにか申し上げるのも変なのですが。あなたのこの小さなお話のことで言いたいことがあるとすれば、それは絵と同じように、もっとあなたらしさを出してほしい、ということでしょうか。今は少し通り一遍な感じがします。あなたが考えているより、もっともっといろいろなことができるとおもいますよ。

メアリも私も、編集部の何人かも、題が長いと思いました。子ねこのスマッジがお話の中心であるの

なら、子ねこの名前がいい題になるのではないかしら。手の込んだ長いドラマティックなお話でなくてもかまいません。ビアトリクス・ポターのかわいい、すてきなお話も、とてもシンプルです。今のあなたの文は、－適切な言葉が見つからなくてごめんなさい－骨がない感じがするのです。

文について私たちが言っていることでお気を悪くしないでくださいよ、クレア。今の短さでいいので、あなたなら、もう少し通り一遍な感じに聞こえないようにできると思うのです。

それからちょっとばかげたことかもしれませんが、「生まれたての子ねこたちはねずみに似ていた」というところを変えていただけますか？たしかにそう見えますが、人によってはねずみから思い浮かぶイメージがいやだという人もいるので、この比喩を取っていただけたら嬉しいです。

あともう一つ、小さなことで申し上げにくいのですが、おかあさんねこの名前は「プッサムズ」ではないほうがいいとおもいます。あかちゃん言葉に聞こえるし、才気あふれるミセス・ニューベリーらしくないと思うのです。」[9]

ノードストロムの手紙は、少しくだけた温かい文面である。しかしその中にはっきりと、作家に対して言うべきことを盛り込んでいる。

絵は何も言うことがなく素晴らしい。しかし文章は「通り一遍な感じである」「ビアトリクス・ポターのような骨がない」と酷評。生まれたての子猫についての表現にも注文をつけ、題名は子猫の名前を使うのがふさわしく、母猫の名前は変更するよう持ちかけてオーケストラの指揮者の如く、緻密な修正を求めている。

筆者は末盛がごく初期に手がけた翻訳絵本が、奇しくもノードストロムが初期に手がけた絵本であったことを興味深く思う。なぜなら末盛はノードストロムのもとで編集者としても活躍していた絵本作家シャーロット・ゾロトウから深く影響を受けており、その後も、繊細な筆致と美しい本作りで末盛をとりこにした絵本作家ゴフスタインに至る、20世紀後半のアメリカの絵本を数多く翻訳出版しているからだ。

2　季刊誌「ひろば」

末盛の優れた絵本を見抜く力の源流をたどることができる修行時代ともいうべき時の連載がある。

1976年から1978年にかけて、末盛は至光社の季刊誌「ひろば」[10] に「私のなかの絵本」を連載した。そこには至光社在職中の海外出版業務の旅、海外の絵本編集者との交流、自身の幼少期の記憶や子育てのエピソードも交え、毎回１～５冊の海外の絵本を、誌面６ページのエッセイにして紹介している。

本論では紹介された絵本を時系列に添って記録するとともに、それらの絵本の中から『はなをくんくん』『カテドラル』『白雪姫と七人の小人たち』『ゆきのひ』『からすたろう』の絵本表紙および末盛の一文と、更に特筆すべき作家であり編集者でもあったシャーロット・ゾロトウについての一文を記載する。

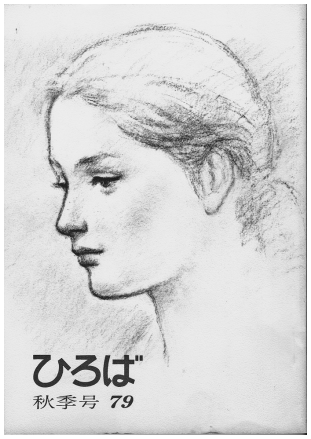

図７

（＊は当時あるいはその後邦訳されたもの。）

(1)　1976年春「小さな子どもたちへ」[11]

＊『The Happy Day』
（by Ruth Krauss
Pictures by Marc Simont
Harper & Row,New York　1949
カルデコット賞オナーブック1950
『はなをくんくん』
木島始訳、福音館書店、1967）

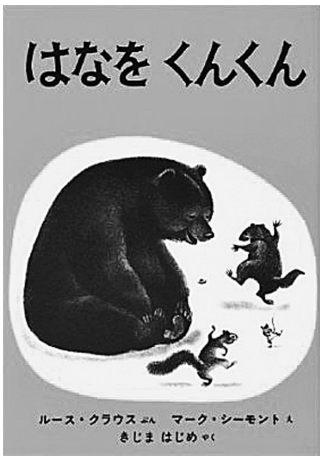

図 8

図 9

「この絵本はたいへんな傑作で、絵本作りの教科書的存在と言ってもいいのではないかと思います。お話と絵がじつによくハーモニーしていて、しかもそんな単純なストーリーでありながら、最後まで人をひっぱっていくだけの強い力があります。なぜだろうかと考えてみるのですが、結局はがっちりした構成力のおかげに他ならないと思います。つまり一冊の本として見た場合に、全体のデッサンがひじょうにしっかりしているということです。

この本の場合、アイデイアそのものは案外スッと簡単に思い浮かんだかもしれません。しかし、それをアイディアだけのものに終わらせずに、少しぐらいの嵐にはびくともしないほど力強く、しかも緻密な、このような絵本に仕上げるには、作者と画家と編集者とで、あらゆる角度から練り上げたのではないかと想像します。」

『Over and Over』
（by Charlotte Zolotow
Pictures by Garth Williams
Harper & Row, New York）
＊『Seasons』
（by John Burningham
Jonathan Cape London
『はるなつあきふゆ』
岸田衿子訳、ほるぷ出版、1975）

(2)　1976年夏「空想の世界」[12]

『And I Must Hurry for the Sea is Coming In…』
（by George Mendoza
Photographs by DeWayne Dalrymple
Prentice-Hall, U.S.A）
『Sam, Bangs & Moonshine』
（by Evaline Ness
Holt, Rinehart & Winston, U.S.A
カルデコット賞1967）
『Vicki』
（by Renate Mayer
Bodley, Head, London）

(3)　1976年秋「すこし大きな子どもたちへ」[13]

『This is Venice』
（by Miroslav Sasek
W. H. Allen, Italy）
＊『Cathedral』
（by David Macaulay
Houghton Mifflin Company, Boston
カルデコット賞1973
『カテドラル』
飯田喜四郎訳、岩波書店、1979）

図10

「これは不思議な本です。ひとつのカテドラルができあがる過程を克明に、時にはまるで専門の技術書のように描きながらも、読み終わった時、読者は壮大な叙事詩に出会ったような感動を覚えます。人類の遺産の偉大さ、美しさを改めて感じるからでしょうか。きっとそればかりではなく、この建築に携わった人間の一人ひとりが、限られた短い生命の中で、名もなく、自分自身その完成を見ることはとうていあり得ないのに、そんなことをものともしないその大きな尺度、価値観、時間の概念に圧倒されるからでしょう。」

『Rembrandt』
（by Ernest Raboff 「Art for Children」
Doubleday & Co., New York）

(4)　1976年冬「クリスマスの夜に」[14]

＊『Snow-White and the Seven Dwarfs』
（by Nancy Ekholm Burkert
Farrar, Straus and Giroux, New York
カルデコット賞1973
『白雪姫と七人の小人たち』
八木田宜子訳、冨山房、1975）

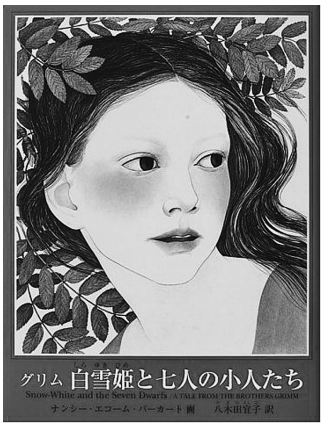

図11

「絵本の世界にあっても、いわゆる古典はいつの時代にも優れた画家や作家、編集者の挑戦を待ち受けているといってもいいのではないでしょうか。

こんなふうに考える時、ナンシー・エコーム・バーカート画、ランドール・ジャレル文「Snow-White and the Seven Dwarfs」は何年に一冊といっていいほどの傑作だろうと思います。この絵本は、グリム兄弟によるあの有名な誰でも知っているお話「白雪姫と七人の小人たち」に正面から取り組んでいて、恐ろしさや悲しさも安直に子ども向けにオブラートに包んで書きなおしてしまうようなことは、一切していないのです。お話の最後で王妃様が焼けた鉄の靴をはかされて死んでしまうところも、そのまま文で語られています。中世の写本や日本画を思わせる細密で美しい画面は、何度見ても見あきないし、おとなにも子どもにもそれぞれ豊かなイメージを与えてくれる貴重な絵本といえましょう。」

『The Christmas Story』
（The Metropolitan Museum of Art
New York Graphic Society）
『Pia's Journey to the Holy Land』
（By Sven Gillsater
Harcourt, Brace & World, INC, New York
※ピアの聖地旅行　スウェーデンの絵本）

(5)　1977年春「ピーターの椅子」[15]

＊『The Snowy Day』
（by Ezra Jack Keats
The Viking Press Inc., New York
カルデコット賞1963
『ゆきのひ』
木島始訳、偕成社、1969）

図12

「すぐれた絵本の作家たちはいつもとても身近に、子どもと子どもの心とを感じている人だろうという気がします。

というのは、子どもがふとした喜びや大きくなるにしたがって味わう、さわやかな苦味ともいえる試練、そして彼らなりの悲しみというものと、いつも

どこかで関わりをもっているからこそ、子どもたちをなぐさめ、いっしょに喜び、暖かく見守るような絵本ができていくのだろうと思うのです。

私にはエズラ・ジャック・キーツという絵本作家が、そういう人だという気がしてなりません。彼の絵本の中でも、ピーターという男の子を主人公にした三冊のシリーズが、とくにすばらしいと思うのですが、それというのもこれらの作品が、キーツと子どもたちの深い関わりを強く感じさせるからかもしれません。

例えば一冊めの「The Snow Day」です。

（絵本の内容説明のあと）

この何気ない雪の日のお話は、なんと暖かく子どもの喜びを描き、子どもたちとその喜びを分けあっていることでしょう。もちろん一冊の本として見た場合にも、とても素直で、しかもみごとなその構成力に感心させられます。ただ単に雪の日を描いた情景描写に終わらせず、一冊の本として完璧なまでのまとまりを見せていると思うのです。」

＊『Whisle For Willie』
（by Ezra Jack Keats
The Bodley Head London
『ピーターのくちぶえ』
木島始訳、偕成社、1974
＊『Peter's Chair』
（by Ezra Jack Keats
Harper & Row, New York,1967
『ピーターのいす』
木島始訳、偕成社、1969）

(6)　1977年夏「ヘレン・ブラッドレイ」[16]

＊『And Miss Carter Wore Pink』1971
＊『Miss Carter Came With Us』1973
『In the beginning said Great-Aunt Jane』1975
（以上３冊とも
by Helen Bradley
Jonathan Cape, London
『ミス カーターはいつもピンクの服』
『ミス カーターといつもいっしょに』
暮しの手帖社、1981）

(7)　1977年秋「シャーロット・ゾロトウ」[17]

＊『Big Sister And Little Sister』
（Pictures by Martha Alexander
『ねえさんといもうと』
矢川澄子訳、福音館書店、1974）
＊『The Quarreling Book』
（Pictures by　Arnold Lobel
『なかなおり』
みらい なな 訳、童話屋、2008）
＊『My Friend John』
（Pictures by Ben Shecter
『なかよし』
みらい なな 訳、童話屋、1997）
＊『A Father Like That』
（Pictures by Ben Shecter
『おとうさん』
みらい なな 訳、童話屋、2009）
＊『The Hating Book』
（Pictures by Ben Shecter
『けんか』
みらい なな 訳、童話屋、1997）
以上すべて
by Charlotte Zolotow
Harper & Row

シャーロット・ゾロトウ

「シャーロット・ゾロトウという人はほんとうに不思議な作家で、日常のごくありふれた誰にでも覚えのある小さなことに光を当てて、それを輝くような絵本にしてしまう魔法使いです。それはまるで彼女の掌にのったとたんに小石が宝石になりキラッと輝くようで、悲しいこともただ悲しいだけのものではなくなってしまうのです。

シャーロット・ゾロトウはこういう絵本を今までに二十冊以上も作り出していて、アメリカの絵本を考える時にはどうしても忘れられない人です。彼女自身が秀でた編集者だという事情にもよると思いますが、彼女と組んで認められるようになった画家も多いはずです。早期にはガース・ウイリアムズ、ベン・シェクター、モーリス・センダック、といった人たちと組んだ本がいくつもあります。

彼女の初めの頃の絵本も美しいものが多くあって私は好きですが、なぜかそこに出てくる子どもたちはいつも静かなやさしい幸福そうな子どもたちばかりでした。ところがこの十年ほどは必ずしもそうではなくなって、そのために以前にも増していよいよ子どもたちの力強い味方になっているような気がします。」

⑻　1977年冬「烏太郎」[18]

＊『Crow Boy』
（by Taro　Yashima
Viking Press, 1955
『からすたろう』
八島太郎、偕成社、1979）

図13

「この本についてひとつ見逃すことができないのは、この本がひじょうに緻密に計算された確かな構成の上に成り立っているということで、これは作者が自分の感動を適確に伝えるために、どうしても必要な重要なことなのです。というのは烏太郎が、ただ単に烏の真似がじょうずだったのではなく、前の方のページで彼がいかにいろんなものに興味をもっていたか、何も言わずに一人でじっと観察していたかがくり返し描かれていて、この少年が他の人には見えないものを見、他の人には聞こえないものを聞いていた様子がはっきりと描かれ、磯部先生というすばらしいおとなの助けを借りて、初めてこれらすべてが自然にとけ合っていき、しかもまわりの人たちにも何かを与えて力強く自分本来の生活に入っていく―とてもみごとな絵本です。

この本が発売以来すでに二十年以上もたっているのに、アメリカでまだまだ版を重ねているのはすばらしいことです。この本を見て大きくなる子どもたちが今でもたくさんいると思うからです。そしてこの本に、かけがえのない光を見出すたくさんの母親がいるに違いないからです。」

⑼　1978年夏「家族に想う」[19]

＊『あかちゃんのくる日』
岩崎ちひろ作、至光社
『May I Visit?』
（by　Charlotte Zolotow
With illusutration　by　Erik Blegvad
Harper & Row, New York）
『Nana Upstairs & Nana Downstairs』
（by　Tomie de Paola
G. P. Putnam's　Sons. New York）

⑽　1978年秋「世界中のすてきなおとなたち」[20]

＊『Gnomes』
（by Wil Huygen、 Rien Pourtvliet Abrams
『ノーム 不思議な小人たち 愛蔵版 』
遠藤周作、山崎陽子、寺地五一 訳
グラフィック社、2013）

⑾　1978年冬「すばらしいとき」[21]

＊『Time of Wonder』
（by Robert McCloskey
The Viking Press, New York 1957
カルデコット賞オナーブック1958
『すばらしいとき』
渡辺茂男訳　福音館書店、1996）
＊『Gift from the Sea』
（by　Anne Morrow Lindbergh
Pantheon Books Inc. New York
『海からの贈りもの』
吉田健一訳　新潮文庫、1967）

末盛の解説を付した五冊の絵本および絵本作家シャーロット・ゾロトウによる絵本は、今日も世界的に評価の高い絵本である。季刊「ひろば」は月刊絵本を購読する母親や幼稚園教諭に向けているため、かみくだいた優しい文面になっているが、それぞれの末盛の評価を抜き出してみると、分析的な優れた一文となっているのが解る。

⑴ 『はなをくんくん』（図８、９）

ルース・クラウス[22]、マーク・シーモント[23]『はなをくんくん』について末盛は「一冊の本として見た場合に、全体のデッサンが非常にしっかりしている。 …… 作者と画家と編集者とで、あらゆる角度から練り上げた

のではないかと想像します。」と述べている。

この絵本は1949年ニューヨークHarper Collins Children's Booksから出版されたノードストロムの編集による絵本である。作者のルース・クラウスはニューヨークのバンク・ストリート教育大学の「ライターズ・ラボラトリー」のメンバーで、マーガレット・ワイズ・ブラウンに続くアメリカの絵本作家のパイオニア的存在。ノードストロムとともに多くの優れた絵本を世に出した。　同じように画家のマーク・シーモントもノードストロムとの絵本『A tree is nice』で1957年にコルデコット賞を受賞している。

上記の作家、画家、編集者が、末盛が述べるようにあらゆる角度から検討を重ね、独創的で力のある、新しい絵本が作られたのである。末盛は「絵本作りの教科書と言っても良い」と高く評価している。

⑵ 『カテドラル』（図10）

デビット・マコーレイ[24]の絵本はこの他に『ピラミッド』『都市』『キャッスル』『アンダーグラウンド』『道具と機械の本』などがある。マコーレイの絵本表現を末盛は「専門の技術書のように描きながらも、読み終わった時、読者は壮大な叙事詩に出会ったような感動を覚える」と述べている。その言葉の通りマコーレイの絵本は、技術について描いた絵本であるにもかかわらず、その壮大な事業に関わっていた沢山の人々が、頭を捻り、難所を切り抜け、考えこみ、完成を夢見ている姿を想像することができる。綿密な調査とダイナミックな筆致で描くマコーレイもまた絵本表現の可能性を広げた稀有な作家の一人といえよう。

⑶ 『白雪姫と七人の小人たち』（図11）

筆者は卒業論文『絵本的表現の可能性』[25]でナンシー・エコーム・バーカート[26]の『白雪姫と七人の小人たち』を取り上げた。この有名な昔話の中から、絵本に描かれた七つの場面は、全て昔話にみられる幻想的なシーンを緻密に描いており、末盛の述べるとおり「中世の写本や日本画を思わせる細密で美しい画面構成」となっている。新たな絵本表現の可能性を広げた力のある一冊であり、末盛は「何年に一冊といっていいほどの傑作」と述べている。

⑷ 『ゆきのひ』（図12）

エズラ・ジャック・キーツ[27]『ゆきのひ』は、子どもの赤いコートと白い雪のコントラストの美しさが際立つ絵本だ。二歳半くらいの男の子ピーターが、興味のおもむくままに足跡をつけたり木の棒で筋をつけたり、その棒で木にフワリと乗っている綿帽子のような雪を落としたり、少し大きな子どもたちの雪合戦の友だち遊びに関心を示す様子などが、子どものゆったりとした時間のテンポ感そのままに、不思議な静けさに包まれた詩のように描かれていく。末盛は「すぐれた絵本の作家たちはいつもとても身近に、子どもと子どもの心とを感じている人である」と述べ、キーツの子どもの心の世界を描く絵本表現を讃える。

更にこの絵本の後半、ピーターの大切な「雪だんご」が、暖かい家の中で溶けてなくなってしまう。ピーターの悲しみが解決する過程を、キーツは子どもの心情に添って描く。その物語の展開について「ただ単に雪の日を描いた情景描写に終わらせず、一冊の本として完璧なまでのまとまりを見せている」と、その構成力についても高く評価している。

⑸ 『からすたろう』（図13）

八島太郎[28]『からすたろう』、この絵本を読む大方の人間は、郷愁に彩られた日本の風景と人々の姿が一見無造作に描かれているように感じ、そして感動的なストーリーが読み手の感情を捉える。読み手はこの絵本が画家の心の赴くまま制作された印象を受ける。

しかし末盛はこの絵本について「緻密に計算された確かな構成」で創作されていると述べ、八島の絵本作家としての知性と、彼が描こうとしていたテーマを深く理解している。

アメリカの読者にとって、東洋の幻想的な村の男の子の六年間の物語は、一種の理想郷の物語でもある。男の子を見出す磯部先生の姿はルソーの時代からの教育哲学の永遠のテーマでもあった。おそらくそのことを知っていた八島は、建築家のように緻密にこの絵本の構成を組み立てたのではないか。

『からすたろう』は、後に末盛が偕成社の今村廣社長に働きかけ1979年に日本での出版が実現した。

戦前に渡米し、戦後の子ども向けの絵本の文章に難儀をした八島に、末盛がその翻訳を助けたことは、ここに記録しておかなければならない。

この絵本について末盛は、「この本に、かけがえのない光を見出すたくさんの母親がいるに違いない」とのべ、唯一無二の大切な絵本として、今日でも各所での紹介の労を惜しまない。

(6)　シャーロット・ゾロトウ[29]「悲しみのひとはけ」

シャーロット・ゾロトウについて、末盛は至光社の仕事で海外に行く度に、ニューヨークのオフィスにゾロトウを訪ねた。ゾロトウは末盛が持参した日本の絵本についての解説や読み聞かせを静かに聞いたという。ゾロトウからはその年にゾロトウが出版した絵本を、サイン入りで末盛にプレゼントする付き合いが続いた。それは1970年台初めの数年間であり、アメリカの絵本の黄金期の輝きを、末盛はゾロトウから吸収していった。

「ひろば」の中で末盛が取り上げていた『A Father Like That』(『おとうさん』) は後に童話屋から出版されている（図13)。この絵本について1970年にノードストロムはシャーロット・ゾロトウに「本当に素晴らしい本です」と手紙を送っている[30]。因みにゾロトウの絵本によく見られる「ウルスラへ」という献辞はノードストロムのことである[31]。

末盛はこの絵本について次のように述べている。

図14

「これは、お父さんのいない子どもがお母さんを相手に、僕にお父さんがいてくれたら、こういうことをしてくれる、ああいうことをしてくれる、とお話しする絵本です。たとえば、お父さんがいたら、僕がいたずらして学校に呼び出されて、先生になにか言われたとしても、「男の子ってそういうもんだよ」と言ってくれるはずだとか、もう本当に理想的なお父さんの姿が書いてあるのですね。…… これは内容的にすごく重要なことをいっていると思います。お父さんのいない子ども、その少年がお父さんに寄せる思い。ぼくのお父さんはああいう人なはずだとか、こういう人なはずだとか、一緒に大工仕事してくれるだろうとか、キャンプに連れて行ってくれるだろうとか、 …… お母さんが嫌がるテレビなんかも一緒に見てくれて、「男の子っていうのはこういうのが好きなんだよな」とお父さんは言ってくれるとか。

そして素晴らしいのは最後にお母さんが「あんたが言っているお父さんというのは、私も本当に好きだわ。それだったら、自分がお父さんになったときにそういうお父さんになったらどう？」と言うのです。これはちょっと胸がきゅんとする、本当にいい絵本だと思います。」[32]

末盛の言うとおり、この絵本は最後の母親の一言が読み手の心に忘れがたい余韻を残す。日常生活のほのかな感動や、小さな悲しみに寄り添うこのような絵本は、その後の末盛の絵本作りの重要なキーワードのひとつとなる。末盛はそのことを「悲しみのひとはけ」と述べて良い絵本の条件の一つに加えた。シャーロット・ゾロトウとの出会いは、末盛が本来持っていた感受性を呼び覚まし、末盛の絵本

観の確立を助けた。

「ひろば」の連載から８年を経た1986年、末盛はジー・シー・プレスで先に掲げた絵本『April's kittens』を翻訳出版する。

さらに同年、同じくニューヨークの絵本作家ゴフスタイン[33]の版権を獲得し、２冊の絵本『作家』（図15）『画家』も翻訳出版した。末盛はゴフスタインの絵本との出会いについて次のように述べている。

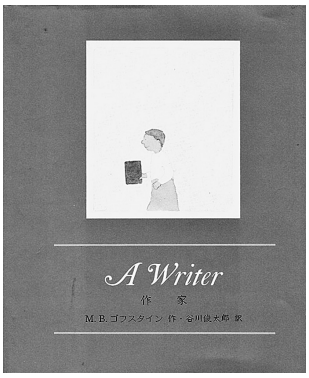

図15

「〈本は美しいものだ〉ということを本当に感じさせてくれる素晴らしい本だと思いました。中身、本のつくり、文字の選び方、あるいは文字の配置、そういうもの全部がとても美しいのです。私自身が自分で言葉にできていなかったけれども、自分が探していたのはこういうものだったのだ、と一種デジャ・ヴュのような感じがする本との出会いでした。」[34]

上記より二年後の1988年に末盛は株式会社「すえもりブックス」を立ち上げて独立した。

至光社の仕事でシャーロット・ゾロトウに出会い、その後「ひろば」の連載を経て、編集の現場に復帰後にゴフスタインに出会い、末盛は編集者としての独自のスタイルを確立しながら歩んでいくことになる。

３．前編のまとめ

本論では、絵本編集者末盛千枝子が、すえもりブックス設立に至るまでに、絵本とどう向き合って来たのかを、季刊「ひろば」連載のエッセイ「私のなかの絵本」と、末盛に大きな影響をもたらしたアメリカの絵本編集者シャーロット・ゾロトウ、アーシェラ・ノードストロムに光を当てて検証を試みた。

ノードストロムと親交がありノードストロムにも大きな影響を与えた、作家であり編集者でもあったマーガレット・ワイズ・ブラウンが学んだニューヨークバンク・ストリート教育大学の創設者ルーシー・ミッチェルは、当時子どもの学びについて次のように述べていた。

「子どもは、自分の家庭環境と自分の鋭敏な五感によって明らかにされる現実の世界にとっぷりつかって人生をはじめる。それゆえ、子どもたちの毎日の経験に根ざしている〈ここで今〉の新しい文学のほうが子ども部屋の伝統的な文学であるフェアリー・テールやマザー・グースよりも、幼い子どもたちに与えるべきものをずっと多く持っているのではないだろうか」[35]

ミッチェルの言葉には当時アメリカ教育界に大きな影響を与えはじめていたプラグマチズムの影響も感じられる。子どもの自発的な成長を促すための環境を整えるのが教育の役割であるとした教育観は広く人々に受け入れられ、1930年代からアメリカでは子どもの経験に寄り添いながら子ども本来の姿を丁寧に描く優れた絵本や童話が創作されていく。マーガレット・ワイズ・ブラウンはその先駆者の一人であり、アーシェラ・ノードストロムとシャーロット・ゾロトウもその流れを汲む絵本作家であり編集者だった。

彼女たちは〈ここで今〉生きる子どもたちの毎日の経験の中に、人間の普遍的な物語の素があることを知っていたし、その子どもたちのための絵本は、子どもの五感によって明らかにされる、子どもの現実に深く根ざしているものでなければならないと考えていた。末盛はそのことに共感し、またそのことを深く理解していた数少ない日本の編集者の一人である。

4．謝辞

本論執筆に際し、現在八幡平市にお住まいの末盛千枝子氏より季刊「ひろば」の貴重な資料をお借りしました。深く御礼申し上げます。

本論は2013年11月２日盛岡児童文学研究会、盛岡市立図書館共催による鼎談　『末盛千枝子さんとともに「子どもの本とわたしたち」』の企画に筆者が携わった事が執筆のきっかけでした。

鼎談の依頼に応じてくださった末盛千枝子氏、共に企画運営に尽力した盛岡児童文学研究会の早坂ヒロ子氏、柏紀子氏、長江洋子氏、土井尻淑子氏に心より御礼申し上げます。

（１）　末盛千枝子

1941年、彫刻家・舟越保武の長女として東京に生まれる。絵本の編集者を経て、1988年すえもりブックスを設立。以後、タシャ・チューダー、ゴフスタインの絵本、皇后美智子さまの講演録などを出版。2008年４月より、代官山・ヒルサイドテラスにて、クラブヒルサイドのセミナーシリーズ「人生に大切なことはすべて絵本から教わった」を開始、2010年４月に『人生に大切なことはすべて絵本から教わった』を刊行後、同年５月に岩手県八幡平市に移住し、株式会社すえもりブックスを閉鎖。2011年３月「3.11絵本プロジェクトいわて」を立ち上げる。2012年２月、長年温めていた企画である、ゴフスタイン『あなたのひとり旅』を刊行。同書を皮切りに、現代企画室の新たなシリーズとして「末盛千枝子ブックス」が立ち上がり、これまで手がけてきた絵本を復刊する「復刊プロジェクト」もスタート。

（２）　舟越カンナ　井沢洋二『あさ One Morning』ジー・シー・プレス、1985年

後に同じ作家のコンビで『冬の旅』(1985)『空に』(1995) をすえもりブックスから出版

※「ボローニャ国際児童図書展」は、イタリアのボローニャで毎春開催される、世界最大の子どもの本専門の見本市。児童書出版とマルチメディア産業に関わる世界各国の作家、イラストレーター、出版社、配給関係者、著作権・特許権関係者、マスコミ、司書などで例年賑わう。1964年に始まった同展は、2013年50回を迎え、60数カ国から1200社以上が出展。来場者数は約5,000人を超える。

（３）「末盛千枝子の仕事を語る ― 安野光雅さん、松浦弥太郎さんを迎えて」

末盛千枝子『人生に大切なことはすべて絵本から教わった２』現代企画室、2013年、269頁

（４）　クレア・ターレイ・ニューベリー『エイプリルと子ねこ』湯浅ふみえ訳、ジー・シー・プレス、1986年

（５）　鼎談　末盛千枝子さんとともに「子どもの本とわたしたち」、盛岡市立図書館・盛岡児童文学研究会、2013年

（６）　アーシェラ・ノードストロム(1910～1988)

ハーパーの児童書部門を1940年から1973年まで指揮した伝説的編集者アーシュラ・ノードストロムは、『おやすみなさい、おつきさま』『かいじゅうたちのいるところ』『おおきな木』『シャーロットのおくりもの』ベバリー・クリアリーのヘンリーとラモーナシリーズ　『どろんこハリー』などの作品を世に送り出した。

（７）　1998年レナード・S・マーカスによってノードストロムの書簡集『*Dear Genius : The Letters of Ursula Nordstrom*』がシャーロット・ゾロトウの編集により出版された。イラストはモーリス・センダック。

（８）　レナード・S・マーカス『伝説の編集者ノードストロムの手紙　アメリカ児童書の舞台裏』児島なおみ訳、偕成社、2010年、44頁

（９）　レナード・S・マーカス『伝説の編集者ノードストロムの手紙　アメリカ児童書の舞台裏』児島なおみ訳、偕成社、2010年、71～72頁

(10)　季刊「ひろば」

月刊幼児絵本「こどものせかい」の姉妹誌として母親や幼児教育関係者に向けて至光社から創刊された季刊のカトリック児童教育雑誌。武市八十雄を中心に編集。1959年４月～1982年12月まで全88冊発行された。1964年から５年間続いた八島太郎「児童絵本とは何か」はじめ海外絵本の紹介など、絵本関連で優れた記事が多く見られた。監修はカトリック幼稚園連盟。

(11)　季刊「ひろば」69号1976年春季、74～79頁

(12)　季刊「ひろば」70号1976年夏季、74～79頁

(13)　季刊「ひろば」71号1976年秋季、74～79頁

(14)　季刊「ひろば」72号1976年冬季、74～79頁

(15)　季刊「ひろば」73号1977年春季、74～79頁

(16)　季刊「ひろば」74号1977年夏季、74～79頁

(17)　季刊「ひろば」75号1977年秋季、74～79頁

(18)　季刊「ひろば」76号1977年冬季、74～79頁

(19)　季刊「ひろば」78号1978年夏季、76～81頁
(20)　季刊「ひろば」78号1978年秋季、76～81頁
(21)　季刊「ひろば」80号1978年冬季、76～81頁
(22)　ルース・クラウス（1901～1993、アメリカ）
　子どもの視点から世界を見ることのできる数少ない絵本画家と評され、子どもの空想や遊びを熟知した上で作られた作品は、想像力やユーモアのセンスに富み、子どもの読者の共感をよんで今日に至るまで高い評価を保っている。
　ノードストロムの編集による絵本には『はなをくんくん』の他『おふろばをそらいろにぬりたいな』『あなはほるものおっこちるとこ』『うちがいっけんあったとさ』（以上モーリス・センダック絵、岩波書店）『にんじんのたね』（クロケット・ジョンソン絵、こぐま社）等がある。
(23)　マーク・シーモント（1915～）
　フランス生まれ。ノードストロムの編集による絵本には『はなをくんくん』の他『木はいいなあ』（ジャニス・メイ・ユードリー文、偕成社、コルデコット賞オナーブック）『オーケストラの105人』（カーラ・カスキン文、すえもりブックス）等がある。
(24)　デビット・マコーレイ（1946～）
　イギリス生まれ。９歳でアメリカに移住。デザイナー、教師、イラストレーターとして広く活躍。調査と取材に裏付けられた緻密なイラストによる絵本は国際的にも高く評価されている。『カテドラル』でドイツ児童文学賞（1975年）『Black and White』 でコルデコット賞（1991年）。
(25)　町田 りん『絵本的表現の可能性』上智大学卒業論文、1978
(26)　ナンシー・エコーム・バーカート（1933～）
　『白雪姫と七人の小人たち』でコルデコット賞（1973年）。繊細で幻想的なイラストにより独特の世界を創りだす。他に『もみの木』（アンデルセン作、中村妙子訳、新教出版社）『おばけ桃の冒険』（ロアルド・ダール作、田村隆一訳、評論社）など。
(27)　エズラ・ジャック・キーツ（1916～1983）
　ニューヨーク生まれ。両親は迫害を逃れアメリカに移住したポーランド生まれのユダヤ人。1963年『ゆきのひ』でコルデコット賞。1965年ユニセフのホリデーカードのデザイナーに選ばれる。1977年『Goggles!』 がコルデコット賞オナーブック。1985年子どもの本の新人作家、イラストレーターを対象にしたThe Ezra Jack Keats Book Awardが設立される。
(28)　やしまたろう（1908～1994）
　鹿児島県出身。戦前の日本で反戦を訴え検挙され東京美術学校中退。1940年アメリカに亡命。絵本『からすたろう』『あまがさ』を描く。『からすたろう』はコルデコット賞オナーブック。
(29)　シャーロット・ゾロトウ（1915～2013）
　ヴァージニア州に生まれる。ウィスコンシン大学卒業。ハーパーの児童書部門で、ゾロトウはノードストロムのもとで仕事を始め、70冊以上の本を書き、ノードストロムの『*The Secret Language*』やポール・フライシュマンの作品など数百冊の本を編集した。
　『うさぎさんてつだってほしいの』（センダック絵、冨山房）『のはらにおはながさきはじめたら』（ガース・ウイリアムズ絵）『かぜがどこにいくの』（ハワード・ノッツ絵、偕成社）等。
(30)　レナード・S・マーカス『伝説の編集者ノード・ストロムの手紙　アメリカ児童書の舞台裏』児島なおみ訳、偕成社、2010年、382頁
(31)　末盛千枝子『人生で大切なことはすべて絵本から教わった』現代企画室、2010年、53頁
(32)　末盛千枝子『人生で大切なことはすべて絵本から教わった』現代企画室、2010年、60頁
(33)　M・B・ゴフスタイン（1940～）
　ミネソタ州生まれ。ベニントン大学で美術、詩作を学ぶ。絵本作家でありニューヨークのパーソンズ・スクール・オブ・デザインで絵本制作を教えている。1972年ニューヨーク・タイムズ紙年間最優秀児童絵本賞。1977年コルデコット賞オナーブック。
(34)　末盛千枝子『人生で大切なことはすべて絵本から教わった』現代企画室、2010年、33頁
(35)　レナード・S・マーカス『おやすみなさい おつきさまができるまで』より「ブラウンとハードの生涯」中村妙子訳、評論社、2001年